

中学校部活動地域移行シンポジウム パネルディスカッション 議事録

日 時 : 12月23日(土)14時00分～16時30分

場 所 : 学び・交流プラザ 多目的ホール

テーマ 「文化・スポーツの大転換期～これからの周南市の姿～」

ファシリテーター 中嶋 健 氏 周南公立大学 経済学部長

パネリスト 松田 眞二 氏 基調講演 講師

西 友理 氏 ACT SAIKYO 代表取締役

藤井 崇史 氏 周南市PTA連合会 会長

西崎 博史 氏 周南文化協会 会長

藤井 秀尚 (公財)周南市体育協会 会長

厚東 和彦 周南市教育委員会 教育長

(以下敬称略)

発言者 (敬称略)	内 容
中嶋	<p>第2部では「文化・スポーツの大転換期～これからの周南市の姿～」というテーマで、それぞれの立場でご活躍されている6名の方々をパネラーにお招きして、フロアの皆さんも一緒に、実りあるディスカッションを進めていきたい。</p> <p>今までと違う新しいスポーツや文化の享受の在り方を創造するためには、社会全体が受け止め、新しい仕組みを模索していかないといけない。部活動の地域移行に関する文部科学省の提言の内容や、周南市の決断の是非の議論はやめ、もっと未来志向で建設的な議論を進めていきたい。もちろんディスカッションの場なので、自由な意見を妨げることはないが、このあたりの趣旨をご理解いただき、よい議論になるよう司会進行役を努めたい。</p>
厚東	<p>新任の周南市の太華中学校を皮切りに鼓南中学校住吉中学校で教鞭をとった。3校で柔道部と軟式野球部の顧問をした。専門外の競技を引き受けた為、苦労もあったが、NHKのテレビ教室を録画して勉強し、技術指導に活かした。今では懐かしい思い出である。</p>
西	<p>バドミントン選手としてACTSAIKYOに入った。ACTSAIKYOは4月から株式会社を立ち上げて、実業団チームとNPO法人を一緒に運営し、地域貢献活動、中学生を対象にアカデミー事業を展開している。私たちの取り組みを、お伝えしつつ、今後さらに子どもたちにどういったバドミントンの場・スポーツの場を提供できるかを一緒に議論したい。</p>
藤井(崇)	<p>市PTA連の会長。指導者の確保、施設、予算など課題は山積。でも逆にこれらも克服できないものはない、当然この地域活動化もきつとうまい具合に行くと思いつつ協議を重ねているところ。保護者には、地域移行しても教育的な意義を含んでおり、教員の熱意もそのまま移行すると思っている方も多い。なかなか保護者も勘違いしやすいので、私としては地域活動化と保護者の皆さんには伝えている。</p> <p>楽しいというキーワードはあらゆることに共通する。現状は限られた中での選択で、自分の</p>

西崎	<p>息子は本当に楽しんでいるのかなと心配している。大転換期を迎えているということで、まだまだ目的自体がぼやけているとは思ふ。私としては子どもたちの成長こそ、保護者であり、地域社会が支えていくものであり、今回の目的は子どもたちの活動を守るため、そして、地域社会の活性化と思っている。</p> <p>今回のシンポジウムはスポーツの色が強いと思うが、一方で文化の方の側面も非常に大切。自己紹介をすると、小さいときは草野球に親しみ、中学校で野球部に所属。高校では、高校に対するアレルギーもあって光に住んでいたが徳山に出てきて、学外活動、映画館に行ったり、市民館で演劇を見たり、津軽三味線を聴いたり、そういう高校時代を過ごした。社会人になって新聞記者生活10年。文化的な面に興味を持ち、社会人になって男声合唱との出会いがあって、今でもアマチュアの域はでないが、男声合唱団のメールソレイネに所属し、39年。そういった活動をする中で現在73歳。65歳の時に縁があって周南文化協会の会長に就任。文化協会は127団体1452人で構成している。9年前会長に就任した時は、2300人ぐらいだったが、少子高齢化の影響で、毎年100人ぐらい退会。指導者もメンバーも高齢化し、60歳代から80歳代ぐらいの方が中心。文化協会の実態は70歳代が一番活躍している。これから先どういうふうに文化の在り方、文化団体として方向性を示していけばいいのか、まさに文化団体も大転換期である。地域移行するにあたって、文化的な指導者が少ない。次世代が育ってきてない、それには働き方改革で、企業の浸透も非常に薄くなっている為、時代背景が非常に色濃く反映している。それを踏まえてのこれからの課題を共に考えたい。地域との連携は、あらゆる団体は単体では成り立たないので、いかに連携を深めるかがこれからのキーワードと思う。今日は共に学んで帰りたい。</p>
藤井(秀)	<p>周南市体育協会の会長。部活動の地域移行がスムーズにできるように、スポーツ活動推進センターを設け、将来、子どもたちがやりたい競技と今地域にあるクラブとのマッチングがうまくできるようにアンケートを実施している。受け入れが可能かどうか、課題は何か、問題点は何かというところを一生懸命アンケートしている。できるだけ早く保護者の皆さんや子どもたちに情報公開ができるように進めて居るところ。地元福川中学校の野球部出身だが、私の母校に野球部がない。少子化で仕方がないが、もともと野球が盛んな地域。スポーツ少年団でやっている子が中学校に上がった時に野球を断念するのではないかと非常に気がかりである。また野球だけではなく、小学校までやられていた競技が中学校に上がった時にその競技をあきらめている子がたくさんいる。体育協会としては何とか地域が受け皿になるよう、今、一生懸命知恵を絞っている。</p>
中嶋	<p>教育委員会では今回の方針を決定するにあたって様々なことを調査されて、いろんなところで議論を深められたうえで周南市の決意と目標をお示しになったと思う。厚東先生から、松田さんの基調講演も含めて、ご感想を。</p>
厚東	<p>トップス広島の「未来を担う子どもたちへの活動を中心としてスポーツを通じた社会貢献に寄与する。」という目的、それから賛同協力する各団体のすばらしさに驚いた。</p> <p>各選手はプロフェッショナルの方ばかりで、彼らが子どもたちに指導することで、子どもたちはすごく楽しそうに活動していると思う。私が柔道部を指導していたころは精神論で指導をしていた。子どもたちは柔道を面白く、楽しくやろうというよりは、先生と触れ合う時間が早くすぎないかなという感じだったと思うが、多分、トップスの選手たちが行って指導するとすごく楽し</p>

	<p>い素晴らしい時間であろうと思う。地域移行には様々な課題があつて、指導者の確保はその一つ。</p> <p>子どもたちが夢とか希望をもてる、あるいは自分の成長が実感できるような指導者が来てくれると一番いい。プロとまではいわなくてもそういった方向で指導していただけるような方々に来ていただく、そしてその指導を受けた子どもたちが、自分が受けた指導を将来、次の世代に返していく循環が生まれてくるといい。方針の中で説明したように、循環、地域貢献、地域の多様な世代との交流といったことが生まれてくることを望んでいる。</p> <p>講演の最後の方に、「前例踏襲ではなく」という言葉が使われた。中学校の教員時代、部活にずっとかかわっていたので、今ある部活動に軸足を置いてこれから先のことを考えがち。今の部活動の状態から発想が抜けきれないと思うことがある。部活動の地域移行は全く新しいものを作っていく楽しさがある。そこに発想が行かずに、過去の部活動・今の部活動にどうしても軸足を置いたままで考えてしまうと、なかなかうまくいかないと個人的に感じている。全く新しいものを作っていくという発想で考えていかないといけないと改めて思った。「これまでは」という発想ではなく、「これからは」とどうしていけばいいのかという感覚で我々は考えていかなければいけない。以上が基調講演を聞いての感想。</p>
中嶋	<p>松田さんは今の厚東さんのお話を聞かれて、トップス広島での指導者の確保、指導者とそれを学ぶ子どもたちの関係について、どのようなお考えがあるか。</p>
松田氏	<p>藤浪晋太郎選手がアメリカから戻ってきて、野球教室を行ったニュースを見ている、「楽しむのが一番。」「楽しければ、どんどんどんどん勝手にうまくなるから。」と彼は言っていた。楽しいから自分たちで考えて、前に進もうと思う。それがやはり一番大事なこと。楽しいから続けたいしうまくなりたいと思う。一つ大事なものは、楽しいことの先にはこういう世界があるというトップアスリートの試合を子どもたちに見せてあげること。夢を抱いて、これに向けて僕たちも頑張りたいと思ってもらえれば競技も続けてもらえる。</p>
中嶋	<p>西さんは ACTSAIKYO のプレーヤーで、今は会社の経営をされ、スポーツへの愛情を深く感じるが、いかがか。</p>
西	<p>楽しくないと続けられないとか、その先に見えてくるトップアスリートの試合を見てもらうという点は、私たちもすごく大事にしている。バドミントン教室では、初心者の方も経験者もいる。その中で「バドミントン楽しかった。」と言って帰ってもらうことに重きを置いている。楽しかったら、また次も参加したいと言ってくれるし、そういった参加者の声がロコミで広がって、どんどん知名度も上がっていく。さらに、バドミントンは楽しいから、選手の試合を観戦、応援に行きたい、競技を続けたいと繋がっていくことを大事にしている。</p>
中嶋	<p>すべての保護者がそうとは限らないが、子どもの成長については苦しさを乗り越えることで成長するという考えをもっている保護者の方も多いかもしれない。</p>
藤井(崇)	<p>先日、体操の池谷幸雄さんに体操教室を開催していただいた。多くの子どもたちが目を輝かせながら池谷さんの指導の下、体を動かしていた。プレーヤーとしてもトップ、指導者としても、最高峰。一挙手一投足ひきつける魅力がある。この時に体操競技というのに興味を持った児童も多かったが、周南市内に本格的な体操クラブはある企業1社のみ。</p>

	<p>文化芸術活動の伝統芸能継承に関しては、先日伝統芸能のお祭りが開催されたが、この地域も自分たちの地域に残るものを引き継いでいくことに大変苦慮されている。</p> <p>これからは多様な活動が、学校から地域にという流れの中であっても、子どもたちの成長の場であるという時間は変わらない。周南市の場合にはそこを「しゅうなんコミュニティークラブ」が担ってくれる。ハードルを低くして、いろんなことに挑戦させてくれるのではないかなど、様々な課題のハードルは高いが、期待している。</p>
中嶋	<p>スポーツを含む文化という領域では西崎さん、何かご意見は。</p>
西崎	<p>松田さんがおっしゃられたスポーツのことは、文化にも全く同じことが言える。この街に文化会館とか美術博物館とか立派な施設があり、スポーツセンターもある。14万都市でこれほどインフラが整備され、立派な活動をしているところは全国的には極めて稀。もっと市民が自信をもって、この街の1つの財産として、有効に活用すべき。お互い支えあっていくことが大事。文化会館は毎年のように海外のオーケストラが公演しているが、その同じ日の文化会館の練習室では地元の吹奏楽団が練習をしている。練習をやめて、一流の演奏に触れるのも練習成果として結実していく。</p> <p>それと、内閣府の調査でも、文化に親しんでいる、暮らしに根付いて文化を意識している人は2割から3割。スポーツは小さいときから色々な機会がある。文化部は私の印象だが、軟弱な印象があり、社会もそういう見方をし、偏見があると感じる。</p> <p>だからスポーツと文化は両輪であって、健全な若者を作っていく、それが社会に出たときに立派な人間として、自分の分野で活躍していく。スポーツと文化双方に触れる機会、親しめるように同じような価値観でアプローチするし、受け止めてほしい。文化に関わりながら、親しんでいる人が少ない。</p> <p>会長になった時に最初に行ったことは、経済的なところで不足している為、地元の企業40～50社を1か月かけて回り、毎年、各企業から最低1万円、年間80万ぐらい入るようになったが、企業の方と接したときに「どうして文化に支援するのか。」という方もおられた。文化と企業のかかわり、あるいは従業員が文化に親しむことが、どれほど企業活動に貢献しているか。町の祭りの中でも、地元の吹奏楽団が活躍、徳山夏祭りでも八正寺前のステージで地元のバンドが大活躍。こういった文化活動も、常にそういう活動がなされているからこそ、いろんな地域の行事の中で、それが生かされていく。先程、伝統芸能についても触れられたが、5年に一度開催の伝統芸能祭りが12月17日に行われた。継続継承に努力しておられる1つの例として、三作神楽に富田中の生徒さんが関わり、富田に住んで和田とはかかわりはないけど、和田の米を食べている生徒がおられた。これが今からの在り方を示しているような気がする。また、文化協会では、5年に1度3日間、文化会館と美術博物館を使い、文化協会のあらゆる加盟団体が参加し、発表をした。2年前から実行委員会を立ち上げ、会合を重ねる中でいろんな分野の団体の人が絆を深め、相互理解やコラボレーションが生まれた。一つの活動を次につなげていく。次に生かすといった新しいスタイルが必要ではないかと思う。</p>
中嶋	<p>文化・芸術とスポーツを一体として選択ができる環境。それを楽しむ経験値がどう広がっていくのか。子どもだけではなくて、大人も含めた人間の成長につながっていくということを感じた。スポーツに限定して申し訳ないが、そういう観点も含めながら多種目を本人の希望に沿う形で経験できる環境、特に文化芸術では施設というのがキーワードになってくる。このあたりについて、体育協会としては、多種目経験をいかに整えていくのか。松田さんの基調講演</p>

藤井(秀)	<p>とも重なる部分もあると思うが、お話しいただきたい。</p> <p>体育協会の方で地域クラブを立ち上げた方に聞き込みを行っているが、皆さん試行錯誤されながらやられている。</p> <p>現実問題として、活動場所の確保、中学校に夜間照明がない、備品の管理をどうするのか、困窮世帯の月謝、送迎、いろいろ細かい問題であるが、共通して言われるのが、指導者の確保。特に平日。現役で働きながら、指導をされている方もおられる。ほぼボランティアの形でスポ少の指導と兼ねてやられる方もおられ、大変頭が下がる。今後、指導者を増やしていくという意味では謝金もこれから考えていかないといけない。周南市には ACTSAIKYO さん、山口銀行の YMGUTS さん、日鉄シーガルズさんもおられる。山口県というエリアではレノファ山口、バスケットボールの山口パツファイブもいるので、子どもたちに定期的に指導してもらえるシステムの構築も考えている。徳山大学から周南公立大学になって、来年度からスポーツ健康科学科という新しい学科も増設される公立大さんともタイアップをしたい。学生が指導することによって学生にもいい効果がこれから出てくると思っている。その架け橋を体育協会がしっかりやっていきたい。</p>
中嶋	<p>今非常に重要なご指摘があった指導者の確保。やはり良いプレーヤーは良い指導者であったという経験をお話しされていたが、トップス広島で指導に当たられる方はトッププレーヤーだが、謝金の問題、スケジュールの管理はどのようにされているのか。</p>
松田	<p>謝金はほぼ無料。トップスの課題でもある。</p> <p>これで本当にいいのかという課題感を持っている。当然、謝金を大幅に上げて払うと調整役の事務局員に払うお金がなくなる。選手からすると、子どもたちから元気をもらっているというのが1つ。もう1つは少子化の大きな問題点で、特にマイナーといわれている競技は競技人口がかなり減少し、自分たちの競技がもしかすると自分たちが生きている間に競技自体がなくなるかもしれない。そういった危機感を持っている。小学校訪問事業が始まった 20 数年前には、いわれるからやるという選手もたくさんいたが、今はそのような選手は1人もいない。とにかく自分たちの競技のことを知ってもらい、子どもたちに楽しい、やってみたいと思ってもらう。実際の競技者にどうやってなってもらえるか。それが競技を残すためのある種「恩返し」でもある。あるいは自分たちが今好きでやっている競技が残ってほしいという気持ちでやっている。謝金の問題は根本的な問題。最初の制度設計の時に考えられた方がよいと思う。</p>
中嶋	<p>プレーヤーは自分の使命として、子どもたちの指導にかかわっている。非常に感動するお話だった。ACT さんはどうか。</p>
西	<p>私たちはアカデミー事業を、NPO 法人で運営している。NPO 法人の収益源は、寄付金。地域の皆様からの寄付と、あとは受講する中学生の参加料で賄っている。お金をいただく以上はそれだけの対価、満足して帰っていただけるよう努めている。今は、対象は中学生・子どもたちなので、毎日同じ練習をしていても飽きるので、イベントを交えながら、例えば、クリスマス会をやったり、忘年会、打ち納めをやったりと、行事を企画しながらやっているところ。</p>
中嶋	<p>指導者に関して議論も深まってきたが、教員の方には部活動を生きがいにされていた方も多と思うがどうか。</p>

厚東	<p>中学校の教員の中には部活動を指導したいので教員になったという声も時々聞く。中学校の教員の第1は当然授業だが、部活動の方にも力を入れて、一生懸命指導している教員もいる。教員の中で、クラブチーム的なものを立ち上げて、中学生を募集し、活動している方もいると聞いている。詳細までは把握していないが、今、国や県の動きの中では、兼職兼業で、先生を続けながら報酬をもらい、地域クラブの活動やボランティアに携わることが可能となる制度設計の構築を検討している。これから先、整理をしたうえで、先生に携わってもらう必要が多々ある。その制度設計の部分については今後整備をしていかなければいけない。</p>
中嶋	<p>周南公立大学は来年度より新しく人間健康科学部が立ち上がり、その中にスポーツ健康科学科をスタートさせる。すでに新1年生の入試をしたが、保健体育の教員を希望するもの、教員になって自分が関わった競技を学校の部活動で教えることを目標としている受験生がかなりの数いた。希望を持っている若者が、部活動がなくなることによって、教える喜び、楽しみを取り上げられてしまい、モチベーションが下がるのではと危惧している。厚東さんの話で、制度的には教員をしながら地域クラブの指導を兼業する道が開かれている。教員が指導することもでき、大学生が指導者として地域に出ていくなど、新しいものを作るところでは厚東さんも私もワクワクしている。</p>
藤井(秀)	<p>ちなみに、新しい地域クラブとして、現役の中学校の教員の方を中心にハンドボールクラブや周南サッカースクールという団体ができている。</p>
藤井(崇)	<p>スポーツ活動を完全移行する他県の自治体の事例の中で、町長が「文化芸術活動は移行が本当に難しい。」と言っていた。スポーツ活動の中では、約8割の生徒が何らかの活動をしているが、保護者として心配なのは残りの2割。2割は文化芸術活動がしたいから何もしていないのか本当にやりたくても、できない子がいるのではないかと。2極化も考えられ、やりたい子は移動も苦にならない。できない子はどうしても、ネガティブになる。その地域は月会費が3,000円。高いようにも思うが、これで活動自体が成り立つのか。ボランティアであれば当然成り立つ。ただこれも3,000円というお金が、家庭によって支出可能か不可能か、2分されると思う。現役の教員へも将来どのような形で関わっていくのか、取り組んでいくのか、又、保護者へどのように説明していくのか。正確な情報提供が今必要だと思う。山口県は兼職兼業の届けをしたら、時間外活動で完全に保証される、でも熱意があってもボランティアで指導される方は自己責任だと県が説明されていた。移行が遅れている地域は引き続き勤務として保障され、手当てはつく。先行しているところは不公平感があるように個人的には思う。全国で当然、ばらつきがある取り組みで、仕方がないところもある。教員へのサポートも必要。</p>
厚東	<p>スポーツ指導に携わる希望を持っている先生へ情報を発信しているつもりだが、受け取り側が情報を掴めていない例が往々にしてあり、教育委員会の中でも話題になる。これから今回のシンポジウムの内容や、今後の協議会、専門部会で協議している内容について、ホームページで情報を公開したい。それから校長会等を通じ、各小中学校にも情報提供していきたい。この部分は申し訳ないが、“遅い”と感じられるかもしれないが、頑張りたい。先程の話で謝金、ボランティアは自己責任などの話があったが、活動費等については、今、専門部会で協議を進めているところ。協議の内容をふまえて決めていきたい。現段階ではお伝えできることがここまで。ご容赦いただきたい。</p>

<p>中嶋</p>	<p>責任問題(怪我、事故等)に関しては今、中学校部活動では学校の方で対応し、子どもたちや保護者へのアプローチをしている。実施主体となる団体に最終的には対応して頂く形になるかもしれないが、地域移行がスムーズに行くよう、市教委又は学校がアプローチし、制度設計と周知を行っていかうと考えている。まだ具体案をお示しできる状況ではないが、スタートの段階でスムーズに移行できるよう進めて参りたい。先ほど松田先生が言われたように、100%は困難。60%か70%か、どの程度の完成度となるか不明だが、出来得る限りのことを想定して体制を整えながらスタートしてしたいと考えている。</p> <p>今非常にシビアな議論を厚東さんに振って恐縮だが、そろそろ、時間である。司会としてまとめることは止めたい。なぜかという、基調講演の中で、松田さんが例に出された大学の単位の獲得の仕方腑に落ちた。周南市は全国に先駆けて、部活動の地域化を計画、宣言し、実現に向けてこれから努力していかうという取組みは大変だが、素晴らしいと思う。そのためにはそれが100%、100点満点でなく、ただし、落第は具合が悪いので60点は取らないとスタートを切れない。周南市の方針を実現する為には、指導者の確保、場所の問題、その他の諸々の問題が山積している。そのことについては、これから何年もかけて人が集い、継続して議論し、整えつつスタートを切る。市民全体へ協力する機運・雰囲気フロアにおられる方々も一緒に広め、高めて頂き、周南市が全国で注目をされる街になっていくことを望む。これからは、細かな問題については企業、学校教育の方々、スポーツ競技団体の方、スポーツを超えた文化活動にかかわる人々や組織が胸襟を開いて、いろんな議論ができるような場を周南市が可能な限り多く整えていくこと。それが新しい部活動の地域化を60点以上のスタートを切れることなのかと。以上でまとめとし、パネルディスカッションを終了する。</p>
-----------	---